

所 陵

No. 86

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



竹内栖鳳筆「兔図」

● 目 次 ●

VRで高松塚古墳壁画の発見当時に体験する	林 武文	2
関西大学千里山キャンパスの「イケフェス大阪」への参加	橋寺 知子	4
和歌山市楠見遺跡出土土器をめぐって—関西大学文学部考古学研究室所蔵資料から—	木下 亘	6
鶴岡市立藤沢周平記念館—藤沢文学を味わう拠点施設—	齋藤 冬華	8
兵庫県北西部寺田火山岩の石器石材産出地		
黒色無斑晶(ガラス質)安山岩・ガラス質デイサイト	山口 卓也・渡邊 貴亮	10
木崎愛吉旧蔵「三井寺朝鮮鐘」拓本	貫田 瑛	12
本山幸彦氏旧蔵 本山彦一関係資料の寄贈について	石立弥生子	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<https://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

VR で高松塚古墳壁画の発見当時を体験する

林 武 文

2019年度から、仮想現実感（VR：Virtual Reality）技術を用いた高松塚古墳石室の体験コンテンツの開発と情報発信を行っている。関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）での研究として開始したが、オープンキャンパスで展示すると長い待ち行列ができるほどの人気で、学内外の様々なイベントに出展した。その後のコロナ禍ではヘッドマウントディスプレイ（HMD：Head Mounted Display）による接触型の展示を避けるため、スマートフォンで視聴可能な Web ベースの VR コンテンツを開発して KU-ORCAS の Web サイトで公開した（図1）。



図1 コンテンツのタイトル画面



ウィズ・コロナ期に移行した現在では、展示イベントが再開されたこと、この間に情報通信技術の著しい進化があったことから、新しいコ

ンテンツ開発の可能性が出てきている。本稿では、現行の高松塚古墳 VR 体験コンテンツの紹介に加えて、今後の開発の方向性についても述べたい。

VR コンテンツの開発にあたり、関西大学博物館より発掘当時の壁画の写真と研究者が制作した復元絵画のデジタルデータおよび石室の形状に関する資料の提供を受けた。2019年度に開発したコンテンツは、石室内部の3次元CGモデルを用い、HMDとゲームコントローラでその中を自由に移動できる6自由度のVRコンテンツであり、発掘当時の壁画と建造時の復元絵画を切り替えて提示した（図2）。イベントにおける展示では、操作と説明は考古学研究室の学生が担当し、来場者の傍らで対話的なVR体験を提供した。その後、説明者不在の常設展示用として、解説音声や字幕が自動的に提示される3自由度のVRムービーコンテンツも開発したが、アンケート調査では対話型の方がより高い評価を得る結果となった。展示においては、来場者の興味に応じたシーンがリアルタイムで提示されることと、教師や補助者のサポートによる安心感が重要な点であることがわかった（図3）。ちなみに、VRムービーのコンテンツは、現在エキスポシティのデジタル教育/eスポーツ施設REDEEに常設展示されている。

2020年度に開発した Web ベースの VR コンテンツは、通信のデータ量を軽減するために、



図2 壁画画像の切り替え表示



図3 オープンキャンパスにおける展示

360°パノラマ画像を利用した。3次元CGモデルの石室内3カ所の視点で全周囲パノラマ画像を生成し、各視点における全周囲の観察を可能とした。ゲームコントローラの代わりに視線ナビゲーションを用い、アイコンを注視して選択することにより、観察位置の移動、壁画画像の切り替え、解説の提示などを行って鑑賞できるようにした。システム構築は、オープンソースのWeb3Dプラットフォームを利用することにより、画面表示をスマートフォンやタブレットの姿勢センサに連動させ、立体視表示が可能なWebコンテンツを構築した。

コンテンツの評価としては、3ヶ月間のWebサイトへのアクセス頻度を調査したが、アップロード当初と広報を行った日はアクセスが増加したが、暫くすると他のコンテンツと同じアクセス頻度に収束した。Webコンテンツの場合は、利用者にサイトの存在を知らせる必要があり、別の媒体での広報が重要となる。

2022年度に博物館より実物大の石室の模型を譲り受けた(図4)。内部の壁には壁画が描かれていて、盗掘口から懐中電灯や内部の光源で照



図4 石室の原寸大模型

らして覗き見ることができる。この模型とVRコンテンツを比較すると、VRでは石室内部の狭さを再現できていないことが明らかである。石室空間内部に視点のみを設定しており、空間の大きさを知るための手がかりが無い上に周囲の壁による身体動作の制約も設定できていないためである。また、盗掘口も模型の方がより狭く感じられる。壁画の発見時には、いちばん小柄な女子学生がここから内部に体を入れて、外の研究者に壁画の様子を報告したとのことである。その時の発掘調査参加者達の感動の記録は書物に残されているが、この模型とデジタル技術を使って、発見当時の体験を提供するのが、今後のVR開発の目標のひとつになると考えている。

現在は、学生と拡張現実感(AR: Augmented Reality)技術を用いたコンテンツ開発を検討している。石室模型の盗掘口部分をARマーカーにして、タブレットや携帯端末のカメラで読み込むと古墳全体および石室内部の空間と付随する情報が提示されるコンテンツである。将来的には、現実世界と仮想世界を融合させて提示する複合現実感(MR: Mixed Reality)技術を利用することができれば、発見当時の古墳の周囲と内部の体験が可能となる。

これとは別に、コロナ禍で進化した「メタバース」技術の利用も有力視される。ネットワーク上に石室のVR空間を構築し、それを様々な場所から共有して利用することができれば、仮想の見学イベントや考古学の体験授業が可能となる。

昨年は高松塚古墳壁画の発見50周年に当たり、博物館主催のセミナーをはじめ学内外で様々なイベントが開催された。壁画は、発見当時から現在に至るまでメディアや書籍等で紹介され、広く一般に知られているが、発見には関西大学の考古学研究者と学生が関与したという点まで知る人は多くない。発見当時の状況をリアルに伝えるコンテンツの開発と効果的な情報発信を目指したいと考えている。

参考文献

- 林武文(2022-3)「デジタルアーカイブに基づく情報コンテンツの開発と効果的な情報発信に関する研究」
KU-ORCAS論集, pp.215-230.

関西大学総合情報学部教授

関西大学千里山キャンパスの「イケフェス大阪」への参加

橋 寺 知 子

「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」という催しをご存知だろうか。大阪は、大阪のまちを一つの大きなミュージアムと捉え、そこに存在する「生きた建築」を通して見えてくる、多様で豊かな都市の物語性を大阪の新しい魅力として創造・発信しようとする「生きた建築ミュージアム事業」に取り組み、普段はめったに入ることができない建築を所有者等の協力により2日間限定で公開するという催し、通称「イケフェス大阪」を2014年から毎年10月末に開催している¹⁾。2016年からは生きた建築ミュージアム大阪実行委員会の主催となり、大阪市近郊の建物もいくつか加わり、関西大学千里山キャンパスも同年から参加している。コロナ前のイケフェス大阪2019には、169の施設が参加し、建物公開やツアー、トークイベントなど計233プログラムが実施された。延べ約5万人が集まる日本最大級の建築イベントである。



このような催しは、1992年にロンドンで始まった Open House London が先駆けであり、現在では世界中の都市で開催されている。これら



をネットワーク化し、企画・運営のノウハウや課題の共有を行うことを目的に、2010年、Open House Worldwide という組織が設立され、50以上の都市が加盟している²⁾。大阪は2019年に加わり、日本で唯一の参加都市である。

コロナ禍の2020年・2021年は、イケフェス大阪はバーチャル開催となり、さまざまな web コンテンツが提供され、建築設計事務所や実行委員会がこのために制作した動画など、こんな時だから見られたもの、聞いた話もあった。だが、この催しは実際に訪れ空間を体験することで、建物の魅力に触れるのが本旨である。3年ぶりのリアル開催となった2022年は、主催者も参加者も案内人も、久しぶりのお祭りの雰囲気を味わった。

関西大学千里山キャンパスは、普段からある程度公開されている施設で、「めったに入れない施設」ではないのだが、それでもキャンパスツアーには多くの申込があり、いつも抽選になる。大学関係者や近隣の方以外には、意外と大学の構内は入りづらいのかもしれない。千里山キャンパスのツアーは、イケフェス直前の平日午後で開催している。イケフェスは、原則土・日2日間の開催だが、その期間に北摂に足を延ばすと、参加建物が集中する大阪市内の見学に影響するからだ³⁾。ツアーには毎回テーマを設け、2時間程度のコースを計画する⁴⁾。2022年は10月27日遅めの午後の開催で、簡文館（博物

館)見学から始め、誠之館、第4学舎、円神館と、キャンパス中央部を時計回りに巡り、夕闇迫る頃、2022年の大学昇格100年に合わせてリニューアルされ、ムードあるライトアップが印象的な総合図書館前の庭を見学して解散、というコースとした。

イケフェス大阪に参加する建築に興味がある人々にとって、関西大学千里山キャンパスの魅力は、やはり村野藤吾設計の建築が多くまとまって現存している、という点にある。このことはさまざまな機会に広報されていると思っているが、参加者からは「こんなに多くあるとは思っていなかった、意外だった」との感想が聞かれる。関大OB・OGの参加もあるが、「村野とは知らずに使っていた」と言われることも多いし、卒業後のキャンパスの劇的変化に驚かれる。もう一つの魅力は、ここが現役の大学キャンパスで、学生たちが学び、クラブ活動にうちこんでいる場であることだろう。生きたキャンパスであり続けるには、今のニーズに応えることが不可欠で、歴史的な建物があると同時に、新しい空間、魅力も望まれる。イケフェスの参加建物は歴史的建造物だけでなく、今注目の新建築や建設現場の見学会、それらを設計する建築設計事務所の見学なども好評である。本学のツアーでも、村野建築だけでなく、近年のキャンパス整備の取り組みも紹介している。

古建築と比べ、20世紀の建築遺産は少々軽く扱われ、遺産というより単なる財産として消費



されることもあるが、その価値が低いということではないだろう。ICOMOS 20世紀遺産国際専門委員会 (ISC20C)⁵⁾ は、Living Heritage (生きた遺産) という概念を示し、古建築と同様に20世紀の建築遺産の価値を尊重する「使いながらの保存」を提唱する。改修を重ねながら進化するキャンパスは、建築遺産としても興味深い。歴史ある大学では、直接的にその歴史が感じられる校舎やキャンパスの景観を大事にし、自校教育やブランディングに役立てているところも多い。関西大学千里山キャンパスも100年の時を刻んできた。その歴史は、建物に限らず立地条件や地形にも感じられる。リビング・ヘリテージとして、今後も千里山キャンパスが学生を育むと同時に、幅広い人々が楽しみながら使える場であり続けられと思う。イケフェスのような催しはそのきっかけを提供する機会となるだろう。

注

- 1) <https://ikenchiku.jp/>
- 2) <https://www.openhouseworldwide.org/>
- 3) 参加建物は事前申込のものもあるが、当日先着順で見学できる所も多い。近代建築や建築設計事務所が多い大阪中心部では、イケフェス・ガイドブックを手に、建物を巡る参加者を多く目にする2日間である。
- 4) これまでのイケフェスでは、「一高一中ツアー」や「千里庵で茶道体験」、「村野の階段を巡るツアー」など、関係者の協力を得ながら実施してきた。
- 5) International Scientific Committee on Twentieth Century Heritage : ICOMOS (国際記念物遺跡会議) の国際専門委員会の一つ。2011年に20世紀建築の保存への取り組み手法に関する共通見解としてマドリッド・ドキュメントを起草し、改訂を重ね、2017年には第3版が承認された(マドリッド-ニューデリー・ドキュメント)。

関西大学環境都市工学部准教授



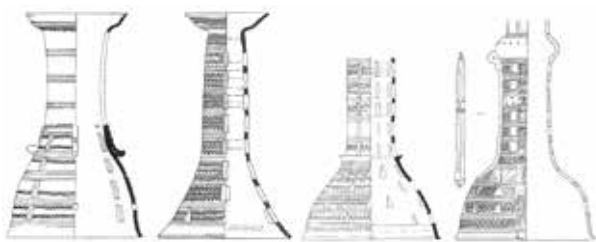
和歌山市楠見遺跡出土土器をめぐって —関西大学文学部考古学研究室所蔵資料から—

木 下 亘

昭和44年夏、楠見遺跡は関西大学考古学研究室によって和歌山市大谷にある楠見小学校校舎増築に伴い発掘調査が実施された。ごく限られた面積であるものの、出土した土器類の特異性から、遺跡の性格を含めその重要性が認識される事となった。報告書によると主な遺構は溝や落ち込みであったが、問題は大量に出土した陶質の土器にある。検出されたこれらの土器は、多数の大甕と鉢形器台を中心に、筒形器台・蓋杯・甕・高杯・壺等があり、これらと共に土師器類も数多く出土した。出土品の中で特に注目を集めたものが大型鉢形器台である。極めて加飾的な土器群で、外面を鋸歯文、櫛描波状文、斜格子文、組紐文、櫛描十字文、円形浮文や蕨手状貼付文等で埋め尽くし、脚部の透かし窓にも通常見られる三角形、長方形に加え円形や半円形、レンズ形等を含む極めて特異なものであった。遺跡発見当時からこれらの土器群が、日本列島産須恵器であるのか、朝鮮半島からの舶載品であるのかは議論が分かれる所であり、報告書に於いても様々な可能性が指摘されている。又、これら一連の特異な土器群に対して楠見式という呼称が与えられ、普遍的な須恵器とは区別されてきたが、此処では地域色の強い初期須恵器として扱う。

今回、研究室に収蔵されている楠見遺跡出土品を詳細に観察する機会を与えて頂いたので、この過程で気付いた幾つかの所見に就いて触れる事としたい。

楠見遺跡の須恵器は、その形態を始め製作技法に於いても陶邑窯にはない独特な手法が用い



左から、楠見遺跡、陶邑 TK13号窯、奈良県葛城市竹内遺跡、韓国高靈池山洞古墳群 出土筒形器台

られている。それは甕肩部に見られる乳状突起或いは胴部成形での横位平行叩きと言ったものである。特に胴部外面に見られる横位平行叩きは極めて特殊で、当該地域の大甕成形技法の目立つ特色と言ってよい。この手法は楠見遺跡を始め鳴滝遺跡、秋月遺跡等からもその出土が知られ、秋月遺跡からは、これに加え乳状突起を持ち底部に絞込み技法を有する甕が出土している。この特徴を持つ甕の分布はほぼ紀ノ川下流域に限定され、中でも北岸域にその集中が見られる。紀ノ川下流域から最も離れた出土地として奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡出土甕を挙げる事ができる。紀ノ川の水運を通じ奈良盆地南部域まで搬入されたと考えられるが、その出土量は限定的なもので、その供給先が盆地全域に及ぶものではない。

大型鉢形器台に関しては、鉢部口縁端部内面に断面三角形の突帯を巡らせる類例のないもので、その祖型は、韓国金海地域の鉢形器台に求められる。因みに口縁端部内面に突帯を持つ器台は、金海大成洞11・20号墳や鳳凰臺遺跡等とその出土が知られている。

研究室所蔵資料の中で先ず取り上げたい資料に、筒形器台がある。筒形器台は初期の須恵器から認められる器形で、陶邑窯跡群からもその出土が知られている。当遺跡から出土した筒形器台は筒部を欠失するものの脚裾部分に関してはほぼ全体像を知る事ができる資料で、復元によれば脚部径31.4cmを計る。脚部は稜線により文様帯を区画し、その中に櫛描波状文を施文、文様帯内に長方形や円形の透かしが配置される。これらの諸点は一般的な筒形器台と大きな差はない。然し最大の特徴は脚裾上部から筒部にかけて縦方向に見られる帯状貼付け装飾にある。この装飾は恐らく4方向に配されるもので、その下端は膨らみをもって仕上げられている。筒部を欠失するため確定はできないが、筒部上方まで直線的に貼付けられていたと考えてよい。外面に貼付装飾を持つ筒形器台の類例を

探すと、日本列島の中では殆ど目にする事はなく、僅かに福岡県羽根戸出土の装飾付筒形器台や陶邑 TK85窯等が思い浮かぶに過ぎない。羽根戸、陶邑 TK85窯のものは動物など具体的事物を単体で貼付けるもので楠見の事例とは明らかに異なる。楠見同様の貼付文の事例が見られる地域として大きく二地域を挙げる事ができる。一つは朝鮮半島百済の地であり、もう一つは同じく大伽耶の地域である。此处で二つ地域の筒形器台を比較して見た場合、より楠見遺跡の事例に近いものは大伽耶地域の筒形器台にあると言える。百済地域の筒形器台に於いても同様の装飾は見られるが、筒部に比べて脚裾部が大きく発達するものが多く、当遺跡出土品とは形態上異質である。図に上げたのは高霊池山洞古墳群出土の筒形器台である。このような貼付装飾は大伽耶地域の筒形器台によく見られる装飾手法で、図示した土器も筒部に同様の帯状貼付装飾が認められる。貼付け装飾細部の形状は異なるものの、その直線的に延びる形状や端部に膨らみを持たせる点等、類似する要素は多い。

以上の様に、楠見遺跡から出土した筒形器台は、その系譜を辿ると大伽耶地域の筒形器台からその影響の一端を受けていると考えられよう。

この様に楠見遺跡出土の須恵器は、器種により金海地域や大伽耶地域といった伽耶諸国の要素を部分的に取り込む形で生産された土器群と考えてよいであろう。

次に楠見遺跡から出土した類例に乏しい土器群は、一体どの時期に帰属するのであろうか。この点を探る手掛かりとして、共伴した一般的に見られる須恵器がそのヒントを与えてくれる。当遺跡でも陶邑窯で普遍的な須恵器資料の蓋杯・甗・高杯・壺等が確認されている。これらの須恵器は、多くは細片となっているが、その時期的特徴を捉えるには十分な資料である。類例の少ない大多数を占める土器群の時期比定に対し、これらの須恵器が果たす役割は極めて大きい。

先ず蓋杯から見ていきたい。報告書に依れば杯類は合計5点が復元実測されている。杯身では土釜形に近いものや、口縁端部が水平に近いもの等が含まれ、杯蓋では、天井部調整が転範削りである等、定型化以降の形態を示している。

甗は小型・大型の両者が見られ、無文のもの

や口縁部や頸部・胴部に櫛描波状文を施すものがある。口縁端部は水平ないしは段を持つもので、その形態から見ても初期に位置付け得る甗ではない。

この様に、共伴資料から見て楠見式とされる土器群の時期は、最古型式より後出する可能性が高く、TK216～TK208型式に並行すると考えてよい。

楠見式土器の時期に関しては、従来から大甗肩部の乳状突起、胴部内面に丁寧に施されたスリ消し調整、底部内面に見られる絞り込み技法など、初期須恵器でも古相を示すと考えられてきたこれら特有の技法に引きずられ、実際より古く位置付けられてきた感が拭えない。特に、最初期の陶邑 TG232・231窯から出土した須恵器大甗に於いて、底部の閉塞に絞り込み技法が確認された事で、より一層その認識が強まったと言えるだろう。

又、楠見式の土器群は、一般的な須恵器とその色調面でも違いが見られる。楠見式の土器群は白味を帯びた白灰色を呈するものが多数を占め、青灰色という通常見られる須恵器の色調と異なる場合が多い。

以上、楠見遺跡の出土土器は、中樞窯である陶邑窯製品とは異なる部分が多く、当該地域での生産を強く意識させるものと言える。然し、出土量からしてもその生産は小規模で、その流通範囲は紀ノ川下流域を中心とした非常に限定された地域であった可能性が高い。

今回は、楠見式と称される紀ノ川下流域から特徴的に出土する一群の土器に就いてその形態や技法面での特色を抽出し、それと共にその時期や系譜を考えてみた。

近年、初期須恵器生産の可能性が考えられる地域は、資料の増加と共に増えてきており、その導入と背景に就いては地域毎に考えていく必要がある。何れにしても中樞窯としての陶邑製品と大きくかけ離れたこの一群の須恵器は、当該地域に於ける初期須恵器生産の実態を考える上で極めて重要な資料だと言えるだろう。

楠見遺跡資料実見に当たり米田文孝・井上主税両教授、渡邊貴亮・小木曾優佳両氏に様々な御配慮を得ました。記して感謝申し上げます。

奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員

鶴岡市立藤沢周平記念館

—藤沢文学を味わう拠点施設—

齋藤冬華

藤沢周平と作品

藤沢周平は日本を代表する時代小説作家である。本名は小菅留治。昭和2年（1927）、山形県東田川郡黄金村大字高坂（現山形県鶴岡市高坂）に農家の次男として生まれ、青年期までを鶴岡で過ごした。教師になり鶴岡の湯田川中学校に赴任するが、2年後に肺結核のため休職。6年余りの闘病生活ののち、東京の業界新聞社に勤め、会社勤めの傍ら小説を執筆するようになる。昭和46年（1971）に「溟い海」でオール讀物新人賞を受賞し作家デビュー。昭和48年（1973）に「暗殺の年輪」で直木賞を受賞し翌49年（1974）からは執筆活動に専念した。

江戸市井の人々や微禄の藩士を主人公とした時代小説を中心に、史実や実在の人物を描いた歴史・伝記小説、故郷鶴岡について書いたエッセイなど、多くの作品を書いた。

代表作としては『蟬しぐれ』『三屋清左衛門残日録』『用心棒日月抄』シリーズ『橋ものがたり』などが知られている。

なかでも江戸時代の庄内地方がモデルといわれる「海坂藩」や架空の藩を舞台とした作品は「海坂藩もの」と呼ばれる。そこに描かれる情景や文化、食などは庄内を彷彿させ、多くの読者を魅了している。

設立の経緯と施設概要

平成14年（2002）の映画「たそがれ清兵衛」など、小説が次々と映画化、ドラマ化されたことをきっかけに、「海坂藩もの」をはじめとする藤沢作品の原風景を求めて鶴岡を訪れる人が増加。藤沢作品をより深く豊かに味わうための施設が求められるようになった。鶴岡市では藤沢周平氏の遺族をはじめ、小説の出版に携わった方や藤沢氏にゆかりの深い方々の協力を得て基本構想、基本計画をまとめた。藤沢氏を育んだ自然や作品に重なる情景、文化に触れることのできる庄内一円を藤沢文学ミュージアムと捉え、藤沢文学が概観でき、作品世界に案内する

拠点施設として平成22年（2010）4月に記念館を開館した。開館以来、全国から多くの藤沢作品ファンが訪れている。



鶴岡市立藤沢周平記念館 外観

記念館は、庄内藩主酒井家の居城、鶴ヶ岡城があった鶴岡公園内に建てられ、派手なことや目立つことを嫌い、「普通が一番」をモットーとしていた藤沢周平氏の人柄に沿うように公園の緑の中に静かにたたずんでいる。

建物は2階建てで、1階に展示室、展示準備室、読書サロン、会議室、事務室、2階に収蔵庫、研究室を配している。

展示概要

記念館では、作品に込めた思いは作家のみが知るもの、また、作品をありのままに読み感じてもらうことを大切にしたいと考え、「評価・評論はしない」ことを展示の基本方針としている。

常設展は3部構成となっており、第2部と第3部の間に企画展コーナーがある。

第1部「藤沢文学と鶴岡・庄内」では、作品に登場する鶴岡・庄内の食や文化、「海坂藩」を彷彿させる庄内の風景を、写真と小説の一節とともに紹介している。

第2部「藤沢文学のすべて」では、作品世界を「武家もの・歴史小説」「市井もの」「伝記小説」とジャンルごとに分けて紹介する。自筆原稿や創作メモなど貴重な資料を展示するとともに、作品に対する藤沢周平氏の思いなどを解説している。

第2部導入の初版単行本74冊を発行年順に一堂に展示した「藤沢周平全作品」コーナーや、

東京都練馬区大泉学園町にあった自宅2階の6畳間の書斎を移築・再現した展示は、見どころの一つとなっている。

書斎は展示室の都合上4畳半までの再現としているが、壁以外は当時の部材を用い、実際に使用していた机や椅子、愛用品などを配している。一般家庭の6畳間に机や、執筆の資料としていた本などが並ぶ本棚が置かれた質素な書斎からは、藤沢氏の素朴な人柄が感じられる。



書斎の移築・再現展示

第3部「作家・藤沢周平の軌跡」では鶴岡における、人生の師ともいえる人々や教師時代の教え子との交流、趣味や日課といった日常、なによりも大切に思っていた家族のことなど藤沢氏自身のことを紹介している。

展示室のほか、著作文庫本や全集、藤沢氏に関する解説書、郷土史の本などを読むことのできる読書サロンがある。備付けのパソコンでは、藤沢氏がインタビュー番組に出演した際の映像を見ることができる。

酒井家庄内入部400年記念企画展

常設展のほか、年2回を目安に企画展を開催している。

令和4年(2022)は庄内藩を治めていた藩主酒井家が元和8年(1622)に庄内に入部して400年という記念の年に当たることから、鶴岡市では様々な取り組みがされた。鶴岡市の施設である藤沢周平記念館においても酒井家庄内入部400年を記念する企画展を前期、後期に分けて開催した。

前期には庄内藩の史実を題材とした作品を取り上げ、作品の背景である庄内藩や、酒井家の歴史とともに紹介する展示を行った。

現在開催中の後期展示では、「海坂藩もの」と呼ばれる作品を取り上げ、モデルといわれる江戸時代の庄内の歴史や出来事が、作品にどのように描きこまれているかを、藤沢周平氏が愛

用していた旧蔵書『鶴岡市史』などとともに紹介している。



企画展「海坂藩もの」にみる庄内藩

イベントおよび高校生との取り組み

企画展以外にも、著名人を招いての朗読会や講演会のほか、館内でのミニイベントを開催している。なかでも昨年度から開催している藤沢周平原作ドラマの上映会は、リピーターを増やすとともに、ドラマの鑑賞をきっかけに作品を読んだとの声もあり、新たな読者の獲得につながっている。

平成27年(2015)からは高校書道部と連携し「藤沢周平作品題名書道展」を開催している。藤沢周平氏の故郷の若い世代に藤沢作品に触れてもらうとともに、来館者にも高校生の感想や、書道という新たな視点から作品を知ってもらう機会となっている。

藤沢周平氏が平成9年(1997)に亡くなってから25年以上が経ち、藤沢文学の作品世界および貴重な文学資料の継承のためには新たな読者の獲得が不可欠となっている。企画展やイベント等を通し、藤沢作品の魅力の発信に、より一層努めていきたい。

コロナ禍による行動規制も緩和されてきた折、ぜひ当地を訪れて、藤沢文学と作品世界に重なる鶴岡の自然や文化、歴史そして食を体感していただければ幸いである。

鶴岡市立藤沢周平記念館

〒997-0035 山形県鶴岡市馬場町4-6

Tel: 0235-29-1880

入館時間 9:00~16:30 (最終受付時間)

休館日: 水曜日 入館料: 320円

HP: https://www.city.tsuruoka.lg.jp/fujisawa_shuhej_memorial_museum/

藤沢周平記念館学芸員

兵庫県北西部寺田火山岩の石器石材産出地

黒色無斑晶（ガラス質）安山岩・ガラス質デイサイト

山口 卓也¹ 渡邊 貴亮²

1 近畿地方中央部の旧石器は使用石材に二上山産出無斑晶ガラス質安山岩（サヌカイト）を主に用いるが、北部山地帯内では流紋岩やデイサイト、安山岩、碧玉、玉髓、瑪瑙など多様な在地石材が用いられる。筆者らは、この使用石材の産出地を解明するために兵庫県北西部の火山地形の踏査を行い、美方郡新温泉町畑ヶ平など近傍の旧石器と対応する可能性のある石材産出地を確認したので紹介したい。

2 兵庫県北西部では、新第三紀鮮新世火山活動（約310万年前）で東西約14km × 約南北17kmの照来カルデラが形成され、約280～260万年前にカルデラ内南西部に寺田火山岩が噴出する。風化浸食と内部堆積で顕在しなくなったカルデラの外縁西南部には、第四紀初期の約260～250万年前に標高約1510mの氷ノ山や1000m超の鉢伏、瀬川、続いて約120～40万年前に約1310mの扇ノ山が火山活動隆起して、兵庫県境西北に1000m超峰8座を擁する「氷ノ山山塊」を形成している（図1）。

寺田火山岩は、特に北東の日本海沿岸から南西方向に氷ノ山山塊を遡上する矢田川の上流域、鉢伏山から瀬川山が連なる照来カルデラ南壁内側の美方郡香美町小代区で観察できる。このカルデラ内側と矢田川河床を中心に寺田火山岩の産出状況踏査を行ったところ、畑ヶ平遺跡群（図2）で確認されている石器に対応する石

材が産出することを確認した。

3 小代区新屋備から茅野にかけて伸びる標高800～950mのカルデラ南壁には、寺田火山岩の備デイサイトが東北から南西方向に約5kmの崖を作ってアバットし、落差50mの八反滝や三つ滝（図3）で灰褐色無斑晶デイサイトの露頭と滝壺の転石を観察できる。カルデラ噴火時に破碎して巻き上げられた第三紀硬質泥岩やガラス質碧玉、自破碎溶岩らしい黒色ガラス質岩もわずかに認められた。

小代区新屋とハチ北スキー場のカルデラ壁鞍部では、スキー場整地や崖切通しの転石としてガラス質～無斑晶デイサイト、流紋岩、松脂岩、長石斑晶をわずかに含み柱状節理の発達する黒色無斑晶（ガラス質）安山岩、碧玉、赤色碧玉、玉髓など多様な石器石材が認められた。黒曜石が採取された報告があるが、未確認である。ガラス質デイサイトは、わずかに長石斑晶を含み透明感のある黒灰色ガラス質で光沢があり、いわゆる下呂石（ガラス質流紋岩）を彷彿とさせるような良質石材である（図7）。

小代区矢田川河床（図4）では、カルデラ底を埋めた火砕岩や溶結流紋岩の上に、寺田火山岩茅野安山岩が噴出して河床となり、カルデラ壁から火山性崖錐堆積物が流下し、デイサイトや安山岩の大礫が河床を埋めている。カルデラ噴火時の破碎泥岩を獲得した凝灰質溶結巨岩も

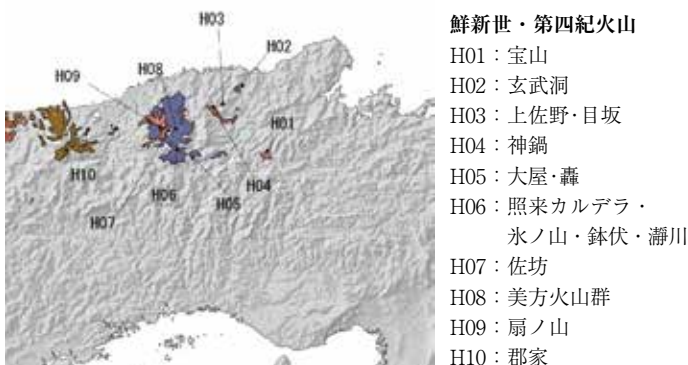


図1 近畿地方北西部の火山



図2 新温泉町畑ヶ平の旧石器



図3 香美町小代区新屋三つ滝の
デイサイト露頭



図4 香美町小代区矢田川



図5 河床の黒色無斑晶(ガラス質)安山岩



図6 寺田火山岩類



図7 ガラス質デイサイトと
三宅早詰北の尖頭器



図8 黒色無斑晶(ガラス質)安山岩と
畑ヶ平の旧石器

ある。河床では、無斑晶デイサイトや珪質泥岩などが採取できた。わずかではあるが、カルデラ壁から流下したと思われる柱状節理と冷却クラックの認められる黒色無斑晶(ガラス質)安山岩があり、斑晶をほとんど含まない良質石材であることを確認した(図8)。

4 ガラス質デイサイトは良質石材であるが、近畿地方では同種石材は知られておらず、発見地の近傍では鉢伏山を超えて南東約13kmの養父市三宅早詰北の薄く透き通った風化面を持つ神子柴系槍先形尖頭器(高松龍暉氏採集)の石材が類似している(図7)。碧玉や赤色碧玉、瑪瑙、玉髓、黒色無斑晶安山岩の一部(図6・8)も、矢田川から北西に登坂して約6kmの扇ノ山溶岩高原にある畑ヶ平遺跡採集石器石材と対応する。畑ヶ平の黒色無斑晶(ガラス質)安山岩が、すべて寺田火山岩由来かどうか、四国産と推定されたものも化学的に検証する必要がある。

寺田火山岩のガラス質デイサイト、黒色無斑晶(ガラス質)安山岩の存在は、近畿地方に瀬戸内火山岩石区以外の無斑晶(ガラス質)石器石材が存在すること、近畿地方の安山岩石器石材の供給が二上山産サヌカイトの一元支配ではないことを示唆している。化学的判定によっ

て、二上山産と交錯する状況が予測される近畿地方中央部の大地形と氷ノ山山塊を含む山地帯内高原や東西南北に走る回廊低地形の中で、双方から在地系安山岩と遠隔地石材両者主客入れ替わる空間的動態解明が課題となるだろう。

寺田火山岩は、照来カルデラ内に多様な岩石を産出していること、石器石材になりえる良質ガラス質デイサイト・黒色無斑晶(ガラス質)安山岩が存在していることを確認したが、現地の急峻な崖地形と森林に阻まれて、それぞれの噴出元の特定と産出状況の記録にまでは至っていない。今後も踏査を継続して確認していきたい。

引用・参考文献

- 先山徹・松田高明・森永速男・後藤篤・加藤茂弘1995「兵庫県北部の鮮新世～更新世火山岩類」『人と自然』第6号
- 高松龍暉・山口卓也 1991「兵庫県畑ヶ平高原採集の石器群」『旧石器考古学』第43号
- 山口卓也 2021「兵庫県北部における安山岩製旧石器の石材山地」『ひょうご考古』第18号
- 山口卓也 2022「濱田耕作の「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」」『関西大学博物館紀要』第28号
- 渡邊貴亮 2021「後期旧石器時代における山地帯と低地帯についての一考察」『兵庫考古』第18号

1：関西大学非常勤講師 2：豊中市立郷土資料館

木崎愛吉旧蔵「三井寺朝鮮鐘」拓本

貫 田 瑛

関西大学博物館の本山コレクションの一部には、木崎愛吉（好尚）旧蔵の金石文拓本資料が含まれ、「梵鐘類」の金石文拓本は200点あまりに及ぶ。なかには、記載銘を有する梵鐘のうち日本最古となる「妙心寺鐘」（京都府京都市右京区）など、貴重な拓本も多い⁽¹⁾。

梵鐘は中国の鐘を祖型とし、朝鮮半島や日本でも鑄造された。日本には、日本独自の型式で造られた和鐘のほか、朝鮮半島から日本へもたらされた朝鮮鐘がある。日本の寺院でよく見かける和鐘と朝鮮鐘には、竜頭と鐘身装飾に特徴的な違いが見られるという。鐘を梁にかける役割をもつ竜頭は、和鐘は双竜頭であるのに対して、朝鮮鐘は単竜頭であり、竜が首を半環状にまげて懸吊の役目を果たす。また、和鐘の鐘身は袈裟襷で覆われているのに対して、朝鮮鐘の鐘身は天人や仏・菩薩等の像を浮き出しにし、上端と下端には唐草文様などで装飾された帯が周回する⁽²⁾。和鐘と比較すると、朝鮮鐘は華やかな装飾を施して鑄造している。

今回、木崎氏旧蔵の梵鐘拓本資料のなかから、「三井寺鐘」（MY-T1881）と題される朝鮮鐘の拓本を紹介したい。この拓本の概要は次のとおりである。

【番号】 MY-T1881

【年紀】 太平12年（1032）12月

【員数】 1枚

【拓本の法量】 縦31.5×横89.7cm

【銘文】 太平十二年壬申十二月日青鳧大寺
鐘百七十斤大匠位金慶門棟
梁元善十四人戸長阮賢等

【備考】 右下に方形印「好尚所蔵金石」、方形朱印「好尚所拓」

【木崎添書】「近江三井寺圓満院弗鐘 大正元年八月廿九日拓」

三井寺（園城寺）は滋賀県大津市に所在する天台宗寺門派の総本山であり、この拓本の朝鮮鐘は現在三井寺の文化財収蔵庫に展示されている⁽³⁾。銅鑄製で、総高77.2cm、身高57.8cm、口径50.0cmであり、重要文化財に指定されている⁽⁴⁾。

拓本は「天人像」「銘文」「乳郭・乳」「撞座」の部分をもとに1紙ごとに写しとり、4紙を継ぎ合せている。朝鮮鐘の特徴である天人像が浮き出しでつくられ、下部には唐草文様の装飾がみえる。拓本は部分的に写し取っているが、鐘の華麗さをうかがい知ることができる。

銘文は鑄崩れがあるため読みにくい字が多い。木崎氏は『大日本金石史』にて銘文を記すにあたり、判読に苦心したようである。その後、藤田亮策氏の詳細な考証を経て、坪内良平氏により銘文全体が判明した。銘文には、太平12年（1032）12月青鳧県の大寺に納められ、鐘

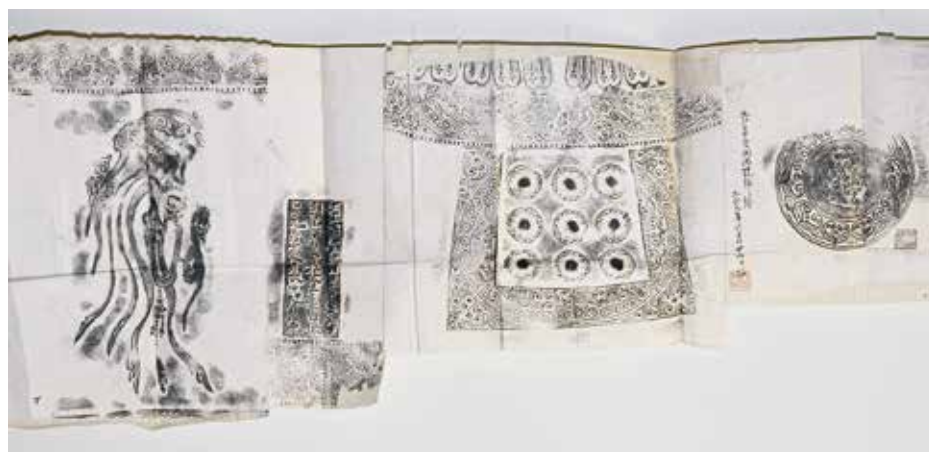


図1 三井寺朝鮮鐘、全体



図2 銘文



図3 木崎氏添書き

の総重量は170斤、鋳物師の筆頭である大匠位の金慶門、総監督である棟梁の元善ほか14人、高麗の地方職である戸長の阮賢などが鋳造に関わったことが記されている。

「太平十二年壬申」は西暦1032年、朝鮮では高麗時代の徳宗2年、日本では長元5年にあたる。太平は遼の年号であり、聖宗即位による太平の年号は10年で終わる。遼の年号を用いる場合、本来は興宗時代の重熙元年に相当する。しかし、当時高麗と遼の関係は不和であったため、高麗は新しい年号を採用しない意志を示すために旧年号の太平を継続して使用した⁽⁵⁾。

拓本には、木崎氏により「近江三井寺圓満院弗鐘 大正元年八月廿九日拓」と添書きされる。木崎氏は、この梵鐘を手拓した時の様子を『大日本金石史』に次のように記している⁽⁶⁾。

わたくしが、この鐘を手拓した時は、園城寺の金堂に陳列し、木枠を構へて、観覧者の手触はりを防いであつたので、非常に苦心したことを記憶してゐる。

木崎氏が手拓した大正元年（1912）8月29日当時、朝鮮鐘は三井寺の金堂に木枠で囲まれて陳列されていた。坪内氏も園城寺金堂内に安置されていると記しており、文化財収蔵庫に移される前は三井寺金堂内に置かれていたようである。しかし、江戸時代は違っていたようで、江戸時代の医師である橘南谿（1753～1805）の『北窓瑣談』には、

過ぎし年三井寺塔中微妙寺開帳の時古鐘あり、芙蓉、蒙斎両子到りて其銘を打し来る。寛政七年乙卯五月蒙斎より其打せる本を借り見る。（○中略）此年六月十七日門人辻三清、森本隼人、松本六郎三士に命じ、三井寺に到りて鐘を見せしむるに微妙寺にはあら

で、前年開帳の時にせしは本坊宝蔵中の鐘なりとぞ。其鐘今に本坊金堂の傍の宝蔵に納めり。（○中略）宝蔵の封は一山の封にて、常に開くことを許さず。三士鐘を不見して空しく帰る。

とある⁽⁷⁾。これによると、過去の微妙寺開帳の時に古鐘があり、篆刻家の高芙蓉（1722～1784）と儒学者の広瀬蒙斎（1768～1829）が訪れたおり古鐘の銘を写した。寛政7年（1795）5月に、橘南谿は広瀬蒙斎から銘文を写した本を借覧したという。そこで、6月17日に門人3人を三井寺に派遣したが、その時微妙寺に古鐘はなかった。微妙寺開帳時に見た古鐘は、三井寺金堂の傍にある宝蔵に納める鐘であった。宝蔵は通常一山封で閉鎖されているため、門人は古鐘を見ることができずに帰ることになる。

また、江戸時代の歴史学者である菅政友（1824～1897）は、「近江国三井寺唐院宝庫所蔵鐘」と題して、朝鮮鐘の銘文や重量などを記している⁽⁸⁾。菅政友のころは、三井寺唐院の宝庫に納められていたようである。

ここから、朝鮮鐘は三井寺の金堂の傍らにある宝蔵→唐院の宝庫→金堂と三井寺のなかを移動して、現在の文化財収蔵庫へ移されたことがわかる。江戸時代には金堂の宝蔵や唐院の宝庫に納められ、現在も文化財収蔵庫にて展示されているこの朝鮮鐘は、三井寺の宝物として今もなお大切にされている。

【引用参考文献】

- (1) 角田芳昭「関西大学考古学等資料『梵鐘拓本』資料と紀年名の記載形式について」（『史泉』53号、1979年）58～72頁。
- (2) 坪井良平『朝鮮鐘』（角川書店、1974年）。
- (3) 三井寺文化財収蔵庫 [http://www.shiga-miidera.or.jp/event/strage/index.html] 最終閲覧日：2023年1月2日。
- (4) 『智証大師1100年御遠忌記念 三井寺秘宝展』（日本経済新聞社、1990年）132、188～189頁。
- (5) 藤田亮策「高麗鐘の銘文」（『朝鮮学報』14、1959年）211～213頁。
- (6) 木崎愛吉編『大日本金石史』第1巻（歴史図書社、1972年）317～319頁。
- (7) 三浦理編『東西遊記 北窓瑣談』（有朋堂書店、1913年）68頁。
- (8) 『菅政友全集』（国書刊行会、1907年）616～617頁。

博物館学芸員アシスタント

関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程 在学

本山幸彦氏旧蔵 本山彦一関係資料の寄贈について

石 立 弥生子

このたび、故本山幸彦（1924～2022）元本学文学部教授・京都大学名誉教授の御令室 本山昭子氏から、大阪毎日新聞社第五代社長本山彦一（1853～1932、号は松陰）関係資料20点を当館へご寄贈いただいた。

本山彦一は、大正から昭和初期に大阪毎日新聞社長を務める傍ら、考古学資料等を蒐集し、日本各地で発掘調査を指揮した。彦一没後、その考古学資料一式が関西大学博物館（当初は考古学等資料室）の所蔵するところとなり、2011年には日本の考古学史を代表するコレクションであることが評価されて、約2万点が一括して国の登録有形文化財の登録を受けている。

幸彦先生と彦一との関係について、昭子夫人にお聞きしたところ、幼少のころに本山家に養子として迎え入れられ、彦一のことを「おじい様」と呼んでいたとのこと。また、今回ご寄贈いただいた資料に「立半」または「立半静雄」の名前が記されたものが多い（図1）ことから、改めてお尋ねしたところ、立半静雄氏は幸彦先生のご実父にあたるとの返事であった。

立半静雄氏は、明治23（1890）年生まれで、大正13（1924）年に嘱託事務として毎日新聞社庶務部に雇用され、昭和3（1928）年6月に秘書課兼務となった。昭和5（1930）年1月に正社員採用となり、本山彦一が昭和7（1932）年12月に逝去するまで彦一の秘書をつとめた。

今回ご寄贈いただいた資料は、おそらく彦一から立半氏へ贈与されたものを幸彦先生が受け継いだと推察する。なかには大正15（1926）年5月8日付けで彦一夫妻が宮島の巖島神社から、同じ宛先（住所）の「立半静雄」と「本山幸彦」に送ったしゃもじ型手紙があり、生後間もなく2歳になるまでに改名していたことや実両親との関係が決して閉ざ



されたものでなかったことがうかがえる。どれも身近の者しか持ちえない、本山彦一の人となりを知る一級の資料であり、その一部を紹介したい。

まずは、彫刻家の曾村杜芽（生没年不明）による彦一の伎楽面風肖像面を紹介する。面の入る桐箱には、彦一以外に、高村光雲、坪内逍遙、徳富蘇峰、吉田芳明の名が連なった伎楽面風肖像制作曾村杜芽後援会による斎藤素巖や北村西望の推奨文とともに、坪内逍遙や徳富蘇峰の伎楽面風肖像面の写真が入れられていた。1913年にアジア人として初のノーベル賞となるノーベル文学賞を受賞したインドの詩人タゴールの肖像面もあり、興味深い。



戦後に青森の日本画壇で活躍した高橋竹年（1887-1967）の作品は、「太刀画」「秋草」「置物の猿」の3点あり、彦一がそれぞれ賛を揮毫している。竹年は、大正初年に25歳で大阪へ転居し、大正10年に大阪の十合百貨店で個展を開催している。



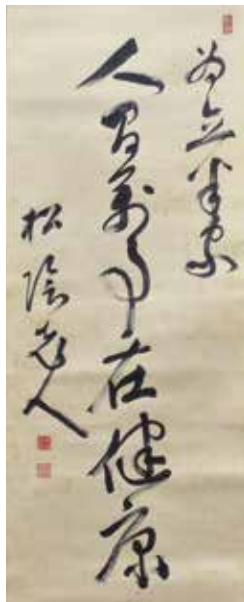
高橋竹年画「秋草」
松陰賛「ふかゝらぬ庭の草にも蟲のねのきこゆる秋となりにけるかな（『明治天皇御集』「蟲」明治16年）」

喜寿を過ぎた彦一が「天下本無事、庸人自擾之」と賛を寄せた九鬼隆一（1852-1931、帝国博物館初代総長）画の達磨図（図2）は、どちらも福沢諭吉門下であった絆を想起させる作品である。

北大路魯山人とも親交が深かったといわれる景正二十五世（加藤作助〔三代目〕 1879～1948）作の瀬戸茶碗（図3）には、彦一によって「日々是好日」の賛が入れられている。

その他、彦一が揮毫した書幅の桐箱に書家の高田忠周（1861～1946）が箱書きしたものや、

北嶺（多田北嶺か）画「三老人図」、昭和2年に毎日新聞社から表彰を受けたことを記念して造幣局で製作した銅製メダルなど、どれも彦一を偲ぶよすがとして、大切に受け継がれてきたことが伝わってくる。



左上から

図1：本山松陰揮毫「為立半家人間万事在健康」

図2：七十八叟松陰賛
九鬼隆一画「達摩図」

図3：景正二十五世作茶碗



彦一の晩年をみとった幸子夫人の作品も2点含まれる。「なき夫の手向けにおらむ花の上になみだのつゆぞまづこぼれける」は、おそらく彦一逝去後に偲んで作られたものと思われる。これには別葉で薄田泣菫（1877～1945）の和歌が添えられている。



書簡類には、1936年に大阪毎日新聞社の社長に就任した奥村信太郎（1875-1951）や役員に名を連ねる平川清風（1891-1940）、矢野龍溪（1851-1931）、日本文学界に「家庭小説」というジャンルを築いた大毎の初代社会部長である菊池幽芳（1870-1947）のほか、土居通夫

（1837-1917）、桐島像一（1864-1937）、谷本富（1867-1946）らのものが残されている。彦一の推敲の跡が残る原稿類やメモなどは軸装されて5巻にまとめられている。



幸彦先生は、日本教育史を専門とし、1988年に京都大学を定年退官後、1995年まで関西大学文学部教育学科で教鞭をとられた。当時は、岩崎記念館の4階に博物館の前身の考古学等資料室があり、本山彦一旧蔵コレクションを陳列して不定期に公開していた。1994年に現在の簡文館内に博物館が開設されたが、残念ながら開館記念式典の列席者に幸彦先生の名前は見当たらない。当時の関係者が、幸彦先生と彦一との関係を知っていたかは不明である。一言も教えを乞う機会のなかったことが悔やまれる。

近年、各所で考古学史研究が盛んであり、当館でも収蔵品の由来を中心に学史的アプローチに挑んでいる。なかでも彦一の軌跡を探ることは大きな課題であり、今回ご寄贈いただいた資料の調査研究を進めて、展示公開するなど教育の場でも広く活用していきたい。

なお、これら資料は、2022年2月20日幸彦先生ご逝去の後に、昭子夫人から京都大学での教え子らに託されたが、同窓の岩見和彦本学名誉教授を介して、本山彦一旧蔵資料を所蔵する当館へ寄贈される運びとなった。

この場を借りて、貴重な資料をご寄贈いただいた本山昭子氏、この間種々お力添えいただいた小股憲明氏（大阪府立大学名誉教授）、正田正博氏（株式会社シー・ディー・アイ代表取締役）、辻本雅史氏（京都大学名誉教授）、足立泰二氏（宮崎大学及び大阪府立大学名誉教授）、そして立半静雄氏についてご教示くださった毎日新聞社代表室一色氏にお礼を申し上げたい。

博物館事務長

◆ 博物館だより

◇2022年度イケフェスに参加

大阪市の「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」の一環で、10月27日に千里山キャンパス内の村野建築をめぐるキャンパスツアーを開催して31名にご参加いただきました。環境都市工学部建築学科の橋寺知子准教授に講師をお願いしました。

◇「博物館実習展」及び「屏風を知る」展の開催



ここ数年、コロナ禍の影響で規模を縮小していた博物館実習展を従来通りの方法で開催しました。今年度は11月13日から18日までの間、44人の実習生が「節約令～庶民のくらしを読み解く～」、「大坂の両替商と大名-預申銀子之事」、「お金のデザイン展」、「結びの文化展」、「桜花爛漫 菊日和」の5班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。また、特別展示として「屏風を知る」展を同時開催し、会期中には421名にご覧いただきました。



◇関西大学博物館冬季企画展「津田秀夫文庫を調査する」を開催

関西大学博物館が所蔵する津田秀夫文庫は本学元教授の津田秀夫（1918～1992）が収集した古文書・和本など約4000点のコレクションで、2022年3月に『津田秀夫文庫古文書・和本目録』を刊行しました。本展示会では、室町時代から江戸時代にかけての古文書や絵図、史料整理や目録化作業で得られた成果などを紹介しました。2022年12月5日から2023年1月21日までの会期中に、405名に来場いただきました。



◇2023年2月13日から25日まで「関西大学と村野藤吾～設計図・写真・絵画～」と、ミニテーマ展「お経と印刷」を同時開催し、来館者は310名でした。

◇このたび、故本山幸彦元本学文学部教授・京都大学名誉教授の御令室 本山昭子氏から、大阪毎日新聞社第五代社長本山彦一（1853～1932）関係資料20点をご寄贈いただきました。概要を本号にて紹介しております。元奈良県知事柿本善也氏からは、本学校友の河内國平刀匠が平成5年に制作した短刀一振をご寄贈いただきました。学校法人関西大学顧問・関西大学校友会名誉顧問（第十代会長）の寺内俊太郎氏からは、國平刀匠の鍛えた刀に刀身彫刻の第一人者である柏木重光氏が夫婦龍を刻した脇差一振をご寄贈いただきました。さらに、校友の中野聡氏から、ご祖父様の茂理親平氏が蒐集した貨幣資料1256点をご寄贈いただきました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

．．． 編集後記 ．．．

表紙の「兎図」（竹内栖鳳筆 一幅 紙本墨画 39×51.5cm）は、書家山本竟山の旧蔵品です。少ない筆の画数で小さく丸い兎のラインが的確に表されており、対象をつぶさに観察し、実物の写生を重視して描かれています。「写生と省筆」を提唱する竹内栖鳳の絵画観がよく感じられる作品です。

博物館の運営にご尽力くださった羽間平安元理事長が2022年9月27日に享年94歳で永眠されました。心からご冥福をお祈りいたします。

